大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

68年運動：ドイツ・西ヨーロッパ・アメリカ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-01-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ギルヒャー=ホルタイ, イングリッド, ペピン, ハンス・ヨアヒム, 大津, 俊雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005918

６８年運動――ドイツ・西ヨーロッパ・アメリカ

イングリット・ギルヒャー=ホルタイ
ハンス・ヨアヒム・ペピン、大津俊雄　共訳

大阪府立大学「言語と文化」向け前文

今年は「'68 年パリの 5 月」で代表され、ヨーロッパ・アメリカ更には日本に及んだ学生運動の高まりから 40 周年目の記念すべき年である。これに関してヨーロッパでは沢山の本が出版され、雑誌に記事が掲載されている。この運動とその結果が生んだ社会変革は、戦後のヨーロッパ文化における一番重要なターニングポイントであったと言う認識が普遍的なのであろう。

しかし日本では本や研究発表は少なく、新聞記事も数少ない。日本人自らが当時を振り返りかつヨーロッパと対比して、それ以降の社会の変化を辿る事は意義のある作業と思われる。

その参考として'68 年運動関連ではドイツでベストセラーになった本 Ingrid Gilcher-Holtey: Die 68er Bewegung : イングリット・G・ホルタイ著「'68 年運動―ドイツ・西ヨーロッパ・アメリカ」を翻訳して紹介する。

著者のホルタイ氏はドイツのビーレフェルト大学とパリのソルボンヌ大学の教授であり、著書も多い。なお我々の翻訳の別の一部は大阪大学文学部哲学科機関紙「メタフュシカ」第 38 号（2007 年 12 月 25 日発行）に載せられている。

ハンス・Ｊ．ペピン（大阪府立大学）
大津　俊雄（神戸国際大学）

まえがき

ベルリン 1968 年 2 月 17/18 日：「ベトナム革命の勝利。革命者の義務は革命を成すこと」

このスローガンが赤い旗の布に書かれてベルリン工科大学の大講義室の中に貼ってあった。他はチェ・ゲバラや銃を握ったこぶしの看板であった。こうした象徴的記号で、全世界の若者と学生達が迎えられていた。若者がベルリンに行った理由は、ドイツ社会主義学生同盟（ＳＤＳ）がはじめて開いた国際ベトナム会議に参加するために、ＳＤＳが招待したのであった。その記号の意味を読める人は、次のことを認識するであろう。つまりＳＤＳはベトナム戦争に反対してチェ・ゲバラの革命理論にのっとっているが、しかし同時にＳＥＤ（東独政党）からは一線を画していると。そのＳＥＤはＳＤＳの「革命を起こす」という革命者の本分へのアピールを、「革命が出現するように助ける」という義務に置き換えた。この会議の運営者の期待や態度を特徴付けている思想とは次のことであった。つまり今存在している社会は、歴史的に指し示されている発展過程への信頼によってではなくて、むしろ歴史を創造し意識を創造する行動によって変えるべきである。

その講義室は満杯だった。教卓の後にさえ聴衆が席を見つけようとしていた。ホールで何が起こっているのかその雰囲気を捕まえかつ映像化するために、ジャーナリストや写真家またはラジオやＴＶのレポーター達がホール全体に分散していた。しかしカメラの前ではなくむしろ会議の舞台裏で、つまり近くのシュタインプラッツ広場付近の喫茶店やヴィーランド通りの共和国クラブの部屋では、決定的な場面が執り行われていた。その会議が公に開かれる前から、そこに色々な人物が集まった。彼らの名前は1968年が日を経るに連れて世間に知られるようになるだろうが、今この人達は先ずベルリンでお互いに紹介した。例えば1968年に世間に出ようとする人物の名前を挙げると、フランスから来たトロツキスト派ＪＣＲ（青年共産主義革命者）のアラン・クリヴィーヌとダニエル・ベンサイード及びアナーキスト派ＬＥＡ（アナーキスト学生同盟）のダニエル・コーンベンディットであり、イギリスから来たのはベトナム連帯キャンペーンまたは「新左翼レビュー」のタリーク・アリとロビン・ブラックバーンであり、イタリアから来たのは社会主義左翼派のＰＳＩＵＰ（プロレタリア統一社会主義党）派代表ジャンジャコモ・フェルトリーネリ並びにアメリカのＳＤＳ（民主社会を目指す学生）の代表ベルナディーネ・ドールンであった。彼らが代表しているグループの特徴は旧左翼との隔たりによって、つまり彼らの抵抗のことばと行為に従わせる態度によって位置づけられている。
すなわち行動を通して啓蒙を媒介することである。具体的に言えば彼らが1968年２月のベルリンで狙っていたのは、アメリカＳＤＳの定義づけに従ってヨーロッパ大陸にも「抗議を抵抗に」変えることであった。

それがどんな形になりうるかを、アメリカ黒人学生によって作られた学生組織ＳＮＣＣ（学生非暴力運動調整委員会）および彼らと協力する民主社会を目指す学生（ＳＤＳ）はもう既に見せていた。ベルリン国際ベトナム会議の参加者に挑戦的直接行動の戦略が理論的に媒介されているのは、ルディ・ドウチケによってである。彼の雄弁はそのアイディアの背後にある挑戦的な行為のカリスマを具体化させている。そして何年も政党の理論教育を受けたフランスの戦闘的トロツキストでさえ魅了している。魅了されたままアラン・クリヴィーヌとダニエル・ベンサイドたちが彼のメッセージをフランス語に翻訳して、「益々エスカレートしている挑戦の戦略」としてフランスに紹介している。しかし彼らは次のことを知らなかった。つまりドウチケはこの戦略をある程度フランスから借用したのである、がしかしそれはトロツキスト派と競争しているアバンギャルドグループからの借用つまり状況主義国際連帯の中心人物であるギ・エルネスト・ド・ボールからの借用であったのだ。ベルリンで1968年初めに開かれたベトナム会議を鍵（キー）体験にしたのは、人物やグループ及びアイディアの網（ネット）目状の結合であった。

国際ベトナム会議の参加者の印象は、あるデモの感覚的な体験で補完された。そのデモの形態については、文字通り最後の瞬間までは決定が下されなかった。二つの筋が同時進行する舞台演技のように、国際ベトナム会議は行きつ戻りつして参加者の目を引いた。様々な言語で発表された演説と共に講義室で質問としてしばしば討論されたのは、ベルリンの上院が下した最終デモの禁止をどうすれば転倒し維持できるかについてＳＤＳが異議を申し立てたことである。参加者をアメリカのマック・ニア基地に導く道路へのデモは、何があっても計画通り実行するべきなのかについて討論されている。

その未解決な場面に内在している緊張感は、すべての参加者に飛び火した。クルト・シャルフ司教とギュンター・グラスによる仲介の尽力もあってデモは許可されたが、計画した道から違う道にずらされる時に、制限されたルールへの違反という原理に対してこれまで抽象的に討論されてきたことへの挑戦が具体的になる。ここで決めるべきは、相手が決めたルールに従うのか、またはそのルールに違反するのか、についてである。

そのデモが順法的かつ平和的だったのは、個人的責任を引き受けたシャルフ司教の影響なのか、それともルディ・ドウチケが演説している間に「暴力を振るわないように思いとどまらせる忠告のメモ用紙」を彼に渡させたエーリッヒ・フリートの影響であるのかは謎のままである。そのデモの新ルートが受け容れられて、ルール違反は一つも無かった。約1,500人の参加者は「ホ、ホ、ホーチミン」というシュプレヒコールで波打ちながらベルリンの通りを歩いた。これはロビン・ブラックバーンがあたかも初めて「1968年の精神」を感じているかのように思える瞬間であった。つまり彼が後で判断を下したように「新しく魅了する政治的雰囲気」であった。「我々は」とタリク・アリが言った。「我々の旗をヨーロッパを支配するアメリカの心臓のど真ん中に掲げた」(フレイザー：180頁)　国際メディアと全参加者の記憶の中にこの事件の30年後にさえ余韻が残るのは、会議での様々な演説ではなくて、その最終デモである。何かが思われていたように動き始めていた。しかしそれは何か？

国際ベトナム会議をスケッチした場面はモザイクの破片ではあるが、68年運動の像を国際的に展開するためには、その破片を集めて組み立てなければならなかった。だがその破片はもう既に次のことを象徴的に明らかにしていた。つまり68年運動は地域的ではなくて国際的な運動であること、従って運動のアウトラインをスケッチする試みは地域的なケーススタディーを乗り越えるべきであること、などである。次に続くアメリカ・イタリア・フランス・ドイツでの運動の再構築は、次の前提によって導かれていた。それは西洋の工業先進国で1968年に頂点に達した抵抗は「学生反乱」または「世代間反乱」よりもっと大きかった。そして「カーニバル」や「空想的逆行」または「文化破壊」や「世界システムの中の革命」というスローガンでレッテル貼りされたが、きちんと分析されてはいなかった。本研究の中心となるのは、その運動の起源や過程を説明する地域的特徴を超えることと、各運動の共通点を明らかにすることである。つまり知的新左翼の思想を論理的に方針付けること（Ⅰ)、支持グループのアクション戦略（Ⅱ)、「異なる社会」への道程での運動化過程（Ⅲ)、各運動における同種の崩壊過程とその余波（Ⅳ）などである。この研究の組み立て構造は、「社会運動」研究の理論的命題・概念・質問・過程によって導かれる。分析的に定義すれば「社会運動」とは、ある程度の耐久性を持ち団体的アイデンティティーによる様々なグループや組織によって維持されたネットワークであって、これらグループと組織は大衆の抵抗によって社会的変更を呼び起こしたり妨げたり、または逆戻りしようとしていた（ナイトハルト/ルフト)。分析的カテゴリーとしての「社会運動」は、社会の基礎的な組織――社会的・経済的・文化的または精神的な組織――の変化を意味している。

第１章

旧左翼――新左翼
運動の知的形成

社会運動は社会的行為から生じる。その活動は社会の中にある内面的葛藤や緊張を顕在化してくる。しかし社会的な敵対感や組織上の緊張は、社会運動よりは常に多いものである。社会運動は決まった組織形態と目標提示に方針付けられていないと、社会活動の運動家は生まれない。それ故、成功している社会運動の運動家のためには、その運動の知的状態が決定的となる。少なくとも活動グループが自己確認と自己認識の象徴システムである知的アイデンティティを得ていることが重要である。通常はこうした知的状態は、インテリが作った秩序計画によって目的に向かって方向付けられている。こうした計画は出来事や構造問題を解釈すること、抵抗原因を分析すること、並びに不満や不快感をそらすことなどを可能にする。自己理解による新左翼の運動であった68年運動を考察すると、こうした運動の過程には――少なくとも米・西独・仏・伊ではこうであったが――知的ニューレフト、ノイエリンケ、ヌーヴェルゴーシュ、ヌォーヴァ・シニストラの形成が毎回先行した。(註１)

第１節
無関心からの覚醒： 新左翼の知的異端者

ソーホー1968年春：カール・マルクスの当時の住居カーライル通り７番から石を投げれば届く距離では、雑誌「ニューレフトレビュー」の編集グループが1960年春に仕事を開始する。１階にはカフェ・パルチザンがあり、ここはロンドンの左翼のコーヒーハウスであり批判的若者の集会所でもある。その若者は文学界の「アングリー・ヤング・メン」(註２)など先駆的思想家が考え始めたことを追体験している。それはつまり時代精神に対する個人的または文化的反抗である。または文化や社会や政治における硬直化に対する反対である。

貧しいネオンがその部屋を照らしていたが、そこでは時には民族音楽や詩人の朗読も演じられている。その喫茶店の直上階には核軍縮のキャンペーンセンターがある。こうしたセンターは反原子力兵器の抵抗運動を組織している。３階にあるのは大学とニューレフト・レビュー・クラブの部屋であり、左翼インテリのディスカッション・フォーラムである。

講演やディスカッションの催しに参加するために、毎週何百人もがここに巡礼してきた。付属の一室に居るニューレフト・レビューの編集委員会が何を計画しているかを皆が知るわけではなかった。しかし9,000の部数で表される雑誌の名前は、少なくとも全員が知っている。「ニューレフト・レビュー」は新しい社会主義運動の中心になりたかった。しかしこの運動の本質に関しては意見が分裂している。当時37歳の歴史学者であったE.P.トンプソンは、イギリス共産党の中に反スターリン的で民主主義的な反対派を設立する試みには失敗したが、彼は1959年の成立会議で「新しい民衆的運動」の創造のために戦った。それ

は労働党を完全に変更する目的でありかつ党を新左翼の民衆運動に入れ替えるのが目的であった。社会学者レイモンド・ウイリアムス（48 歳）は次のように語った。「もし新左翼のインテリがイギリスの現代社会についてここ 10 年以内に 20 冊の良い本を出してくれたなら、もうそれで満足するだろう」と。その会議の参加者の多数は、両方の立場の混合体になった。つまり「ニューレフト・レビュー」は社会主義の伝統に理論的な新しい基礎を作って、同時に実践的かつ政治的に運動化するという課題を与えられた。こうした狙いは初めから核軍縮のためのキャンペーン（ＣＮＤ）と結びついていた。だが新左翼の狙いは、より幅広い枠組みである。新左翼は次の 3 点を通して新しい社会のための基礎を作り、原爆と冷戦を乗り越えて新しい政治を作ろうと目指していた。つまり全ての社会分野が政治的無関心によって性格付けられた（過剰）社会の枠内での「反権力」（相殺する力）の創造を通して、また直接行動による新しい「民主主義的革命戦略」の実証実験を通して、並びにトンプソンが「ニューレフト・レビュー」で「民主主義的な自己活動」と「コミュニティープロジェクト」と書いたように、社会批判や市民参加の行動による新しい知識の創造を通して、である。新左翼が狙っていることは様々な活動文脈におけるコミュニケーション過程または習得過程に基づいていて、一歩ずつ拡大充実する変遷過程である。新左翼の活動家のための最初の行動の枠組みとしては、小グループによって次の点が形成されるべきである。つまりこの中ではメンバーの関係の直接性が守られるべきであること、この中では個人個人のコンタクトを通すコミュニケーションが開発されるべきであること、そして官僚主義的傾向が防がれるべきであること、である。新左翼の反官僚主義的性格に応じている組織体制を発展させると言った前述の試みが、フランスでも実行された。その体制とは彼らの価値方針または目的方針が実行されうるものである。

パリ 1960 年春。二人の旧トロツキスト派メンバーのコネリウス・カストリアデスとクロード・ルフォールによって編集されていた雑誌「ソシアリズム・ウ・バルバリ」（註３）に集う輪読会の始まりは、1949 年の成立の年に遡（さかのぼ）る。しかし 1959 年以来、編集委員会はパリ郊外つまりフランスの田舎においても討論グループを設立しようと努力してきた。編集委員会が「アーギュモン」誌の再開のきっかけを作った。この雑誌の編集者はほとんどがフランス共産党の異端者であった。それ故に彼らはもう既に支配しているものを、フランス国内にも作ろうと試みていた。つまりそれは旧左翼との縁を切ったが、私的生活に引きこもってあきらめる積りの無かった事では、よく似た者同士のネットワークである。社会学者エドガール・モラレとアラン・テュレーヌおよび哲学者アンリ・ルフェーブルが属していた「アルギュモン」誌のサークルはベルリンへのコンタクトを持っていたが、そこでは 1959 年に「ダス・アルグメント」誌が出来て、その周辺に間も無くアルグメントクラブが出来た。その上イタリアにも繋（つな）がりがあり、イタリアでパリのグループと連絡を取っているのは「ラジオナメンティ」誌である。イタリアでは新左翼の機関紙として「クアデルニ・ロッシ」（1961）、「クアデルニ・ピアチアンティーニ」（1962）、「クラッセ・オペラヤ（註４）」（1963）がヌォーヴァ・シニストラの後に続いた。1960 年 3 月パリで遂に第 3 グループつまり状況主義国際派からも、全ヨーロッパにまかれたメンバーを繋ぐ「金糸銀糸細工の繊細なネット」を伸ばすための合図が与えられている。ダダイズム、シュールレアリズおよびレットリズムの伝統の中に立っているグループが、或る「マニフェスト」で

ユネスコの建物を占領しようと要求していた。マニフェストを書いた訳は、この様に芸術の官僚主義化や全文化の官僚主義化に対して反乱するため、並びにこうした行動を通して「生きている瞬間の編成」という新しい文化の生産者を組織化するためであった。

概観した知的サークルは小さくて異分子の混合であるので、理論的根拠は互いに随分離れている。だからその場主義者は「アーギュモン誌」の編集者を「歴史のゴミ箱」へ出来れば放り込みたかった。しかしすべての矛盾を超えて彼らを統一していたのは、旧左翼つまり伝統的社会主義者、社会民主党や共産党との線引きである。こうした線引きは、それぞれの時代の出来事がきっかけとなった。例えば 1948 年プラハの出来事、1956 年ソ連共産主義者の第 20 回会議、ハンガリーでの反乱制圧、冷戦と東西の核軍備拡張、などである。

福祉国家の民主社会主義の改良主義及びスターリン主義による共産主義の変態（性的倒錯）を同じく批判していながら、伝統的左翼党の人々は活動に対して現実政策的な偏見を持っていた。従ってこうした旧左翼はこの現状を政治的かつ社会的に乗り越えるには無能だと見なされる。現社会の変革には基礎があるとはいえ、彼ら新左翼が目指しているのは旧左翼の解放運動の組織的で戦略的で理論的な基礎を、包括的に分解して再建することである。

それと同時に 20 年代以降の共産主義と社会主義の発展と批判の討論が行われていた。

その新左翼インテリが伝統的左翼に対して打ち出した新しい知的方針を概観すれば次の５点である。

――第１点はマルクス主義の新解釈。

マルクス初期の書物を取り上げながら新左翼は搾取の様相ではなくて、主として疎外の様相を強調している。新左翼はマルクス主義と実存主義との関連の中およびマルクス主義と精神分析との関連の中に理論的解釈のための開口部を探している。それはマルクス主義の理解を、硬直症的凍結や組織化されたマルクス主義からの同一視から解放する為である。

――第２点は社会主義的な社会秩序の新しい計画。

新左翼が確信していることが、社会主義が政治的社会的な改革、権力の奪取、生産手段の国営化だけのことに過ぎない点は許せない。むしろ社会主義は居住領域、家族、個人の余暇、個人の性的関係、個人の社会的関係などでの人間疎外を止揚することが必要である。

――第３点は新しい変革戦略。

個人は生活共同体との従属関係から解放されるべきである。

文化の領域での変化は前提であるが、社会的政治的な変革を先取りしなければならず、それへ向けた新しいコミュニケーションと生活様式が開発されるべきである。その方法は新しい文化的理想の創造を通して、かつ理想のサブカルチャーへの移転を通して、並びにこれらの新しい文化的理想を既存組織の中に「反対勢力」として試さなければならないことを通して、予言的にかつ体験的に開発される。

――第４点は組織の新しいコンセプト。

新しいスローガンとなるのは、組織化ではなくて行動である。新左翼は自分を、政党ではなくて運動として理解している。新左翼は運動面で直接運動の戦略の**全ての特徴**に沿っている。新左翼が指摘しているのは、行動を通して理解を作ること、刺激を通して大衆を覚醒させること、行動の中と行動を通して活動家を変革することである。

――第５点は社会変化の支持者の新しい定義。

社会的文化的変化の支持者は、もはやプロレタリアだけとは見なされていない。新左翼は社会の変更へのきっかけを新しい支持グループが与えることから出発した。つまり（専門教育を受けた）新しい労働者層や若いインテリや社会の端のグループなどである。

団体や個人の解放運動または社会や文化の批判そして文化や社会の革命という３つの噛み合わせは新左翼の思考・思想に基づいていて、‘６８年運動の内面的な緊張感であると同時に世代過程の表現としてまたは新マルクス主義的・反官僚主義的・文化革命的・性解放的な運動として、研究者がその運動を多様性と名付けているように様々な部門のレッテルを貼っている。全社会的なユートピアは様々な流れに結びついていて、それらはサンシモン、フーリエ、プルードン、マルクスそしてバクーニンの社会的ユートピアの伝統に分類されている。しかしこの流れのユートピア的内容は「仕事が他人によって決められる」という手段からの解放への期待だけではない。そのユートピアは様々なテーマや今日「ポスト物質主義的」と名づけられている個人的価値を表現し、あたかも「古い運動」から「新しい社会的運動」への橋渡しを意味している。

解放戦からプロレタリアを分離することは、若いインテリに委任を与えた。それは彼らが新しい「革命的主体」として社会的討論に介入するためである。新左翼が解放の新しい支持者の組織化を断念し、社会組織制度に運動化を通して圧力をかけている運動として自己を理解していることは、反原子力運動から軍縮運動、人権運動を経て反植民地運動までの沢山の抵抗運動にとって新左翼自らを解放しかつ連帯能力を与える。例えばアメリカでは運動の協力者は学生運動、ベトナム反戦運動、公民権運動であった。西独においては復活祭デモ運動、有事立法反対運動や学生運動であり、フランスとイタリアでは学生運動と労働運動の相互作用が行われている。

しかし大学から工場に飛んでいく抵抗の火花が 1968 年ゼネストの引き金になったのは、フランスだけである。新左翼が短期間に広い社会運動になるのはここだけであった。その運動は旧左翼政党をいわば「下から」挑発するだけでなく、むしろシャルル・ド・ゴール将軍の第五共和国を深刻な経済・政治危機に突き落とす。(註 5)

68 年運動の形成に対する知的新左翼の刺激と思考問題はどんな影響を呼び起こしたのかと言う疑問が残っている。何故なら理論雑誌を創設した様々なクラブや読者サークルのほとんどは、ベルリンのアルギュモンクラブを別にして寿命が短かった。

「アルギュモン」と「社会主義か野蛮主義か」は既に 1962 年と 1966 年に廃刊した。つまりその運動化過程が始まるずっと前に廃刊した。Ｅ．Ｐ．トンプソンは雑誌「ニューレフトレビュー」の論説で、新左翼を「思想の運動」と名づけた。そして「実は知的新左翼を動かしたのは理念であった」とも書いた。その新左翼は時代の流れにマルクス主義を開いた、と同時に部分的に様々なポジションを発掘した。次の世代の思考はこうしたポジションに結びつけることが出来た。それは社会の分析、目的の投影、新しい運動化形式または行動形式であった。

第２節
新しい体制批判者（アバンギャルド）：民主社会を目指す学生ＳＤＳ、社会主義ドイツ学生同盟ＳＤＳ、シチュアシオニストとゴーシスト

知的新左翼思想の社会的意義を説明するために、それぞれの思想の成り立ちや影響の文脈を区別することが大切であるが、他方は伝播過程の中で思想が変化し始めることも考慮するべきである。例えば新しい文脈条件との出会いの中での伝播、また新しい支持グループによる習得過程における伝播、並びに意図されていなかった二次的結果を呼び起こすことが出来る伝播などがある。知的新左翼の知的方針が孤立したままではなくて、むしろ社会グループの想像や態度や考え方に影響を与えた他の団体の意義構築と共に発生してきたことから出発すれば、発散過程を特徴付ける断層または緊張を測ることが出来る。このため新しいアバンギャルドによる習得過程や知的新左翼思想の媒介が、共産主義の党の存在そして彼らによる――フランスとイタリアでの――特徴ある政治の部分への分化などによっても影響を受けた。

ポートユーロン 1962 年夏：1962 年 6 月 11 日にデトロイトから 40Ｋｍ離れたポートユーロン（ミシガン州）で民主社会を目指す学生（ＳＤＳ）から招いたアメリカの学生グループ代表の 59 人が集合している。議論されるべきことは次のプログラム草案であった。つまりそれは公にＳＤＳの自己理解を表すべきであると同時に、ＳＤＳに批判的な周辺社会との討論に連帯したいグループのために初めての対話基盤になるべきものである。連夜の議論の結果として採択されたプログラム的宣言は次の様な文で始まる。「我々は現世代の人間であるが、それは質素の安楽の中に育てられ、現段階では様々な大学に預けられ、かつ或る日我々のものになるであろう世界に対する不快感に満たされた人間である。」学生達が感じている不快感を「ポートユーロン宣言」が歯に衣着せず明らかにしている。その宣言は次の事項に反対している。それはアメリカの黒人差別、原爆を目の前にした全員の永遠の死の危険、全世界の破壊をあおる武器産業財閥、この社会の中の新しい貧困、並びに人類の 2/3 の栄養不良であるが、アメリカは更なる世界の産業化を通してしかこれに応じていない。だがその不快感や様々な原因の命名は、その宣言の意義を作っている。つまり日常の人種差別とアメリカ憲法との矛盾、平和への政治的主張とアメリカの軍備増強との矛盾、先進国社会での物資過剰と途上国での栄養不良との矛盾、これら三矛盾が宣言の意義を作っているだけでなく、むしろ宣言の意義はＳＤＳが矛盾を説明するために利用している解釈の中に存在している。アメリカ社会を関連付けているステイタス・クオ（現在の状態）とアパシーの関連並びにアパシーと市民参加機会の不足との関連、アパシーと現存社会のオルタナティブの関連を作りながら、学生達がイギリスの新左翼の社会批判の様相を取り上げている。

Ｃ．ライト・ミルズは「ニューレフト・レビュー」の討論に「新左翼への手紙」と言う公開書簡で参入し、ロンドンのグループに個人的なコンタクトを直接持ち、アメリカ社会における同グループのイメージに強く影響を及ぼしたが、彼は著作を通してこうした思想の短編を紹介している。彼の分析である「ホワイトカラー：アメリカ中間層（1950）」「パワーエリート（1956）」「第 3 次世界大戦の原因（1958）」並びに彼の公開書簡は「ポートユ

ーロン・ステートメント」に直接受け入れられた。何故ならそれらは素案作りを委任されたトム・ヘイドンの集中的テキストであり、アルベール・カミュの書物と共に中心的関連テキストであったからである。23歳のトム・ヘイドンはミシガン州アン・アーバンで社会学の学生であり、丁度その時ミルズについての修士論文を書いているところである。ミルズはマルクス主義者ではなくて、ニューレフト・レビュー周辺のインテリの目で見れば「左に立っているけれども左に属していない」(ミリバンド)。しかし独立したラディカルな思想家としての彼は、あらゆる協議を忌み嫌い、好んで協議を壊したが、新左翼によって評価され、歴史的主体を巡る討論への参入の後、彼は「新左翼の偉大な父」として左翼仲間として妬(ねた)み無く認められている。「ニューレフト・レビュー」の編集者よりも一層ラディカルなミルズは、社会変動過程の革命的主体としての労働者層への信仰から離れて、新しいアバンギャルドとして若いインテリである若者層を見出した。この点において民主社会を目指す学生(ＳＤＳ)は、彼に無条件に従っている。

ＳＤＳの学生達は若者を新しい支持者と見なし、また大学を「潜在力あるベース」及び社会変動を呼び起こしている「運動機関」と見なす。彼ら学生は大学から次のことを試みるのに尽力したのである。つまり世の中の無関心に対して厳しい態度を取ること、個人的困難や公的弊害の政治社会的または経済的な原因を指摘すること、並びにオルタナティブや変化の可能性を展開すること、である。学生達は社会変化途上の道具として、次のことを宣伝した。第一に無関心のオルタナティブとして「参加民主主義の創造」を通して活動的市民参加を宣伝したが、こうした民主主義はカミュの「異邦人」に典型的に示された無関心や無関係性を、基礎主義的で組織されたプロジェクトへの個人的で直接的な参加のために止揚するものである。第二に大学のキャンパスで活動している若者で出来ている軍事的新左翼の創造である。これは学生サークルの中に異常に広がっていると思われる「無関心に対する無関心」を壊すためであり、かつ彼らの行動とアメリカの平和市民労働者運動並びに国際的協調相手との調和を実現するために学外で尽力するためである。

「世代への行動計画(アジェンダ)」というサブタイトルを貫った「ポートユーロン宣言」は、情熱を込めた次の文章で締めくくっている。「よく言われたように、我々が到達不可能なものを求めていると見受けられたら、想像外の結果になるのを防止するために、『我々ならこうする』と意見を表明してください。」

フランクフルト 1962 年秋：1946 年に成立したドイツ社会主義学生同盟(ＳＤＳ)の第22回目の代表者会議が10月4・5日にフランクフルトで開催されたが、それは次の二つのテーマによって影響を受けている。つまり理論と実践との関係およびＳＤＳ大学報告書についての討論との関係である。1961 年以来ドイツ社会民主党(ＳＰＤ)党首の両立不可能な結論によって、ＳＰＤ党首から離れているＳＤＳは、新しい理論的な自己理解やプロフィールを求めている。ＳＰＤのゴッデスベルグでの党大会(1959)で成し遂げたマルクス主義の伝統からの離脱に対して批判的な距離を守っているＳＤＳが、社会主義的理論研究を内面的自己理解過程の課題として強調している(註6)。「我々の理論は」とエリザベト・レンクは 1962 年 SDS 代表者会議での発表で「懐中電灯の光のごとくにあるべきである」と述べる。「この光は将来への道を少し明るく照らすために十分強くなくてはならない、しかし同時にこの光は現代社会に当てられたままその社会のヒビ、割れ目、数世紀前からの

埃、かび臭さ、蜘蛛の巣、を照らすものでもある。」なぜなら我々が「本当の新左翼である」という要求に適合するためである。ＳＤＳをドイツ連邦共和国の新左翼学生の結晶核にさせるというヌォーベル・ゴーシュ（新左翼）の理論や戦略の出発点や受容と共に、代表者会議の後に社会主義の巨匠（マルクス、バクーニン、ルクセンブルグ、ルカーシュ、コルシュ）の書物、フランクフルト学派の社会理論及びヴィルヘルム・ライヒの性理論の再発見が始まる。従って30年代に中断されて戦後ドイツでは再び取り上げられなかった理論的な討論に、再び接続している。

「ポートユーロン宣言」に比べられるプログラムは、ドイツの理論討論からは生まれてこない。ＳＤＳは「プログラム的宣言のための草案」を超えることが出来ない。しかし発展され討論されまたは加筆されているのは、大学連合の外部組織を形付ける「大学民主化のための報告書」である。報告書の中で批判されているのは次の各点である。教養教育の縮小、例えば「ステレオタイプな知恵の具体例、ノウハウの単なるスローガン」、大学の「産業化」つまり産業・経済の企業組織に方針付けられた研究所の厳しい規律の導入、教授達の寡頭政治、研究過程への参加や認識場所としてのセミナーから完璧に仕上げられた「思考結果の受容」（学生たちのレポートと教授達の独演の形で）の場へのセミナーの格下げ並びに職業生活に於いてより高いアカデミックな位置の優先を確保して大学での勉強を「キャリア作り」（マルクス）に結晶させる「権利証明書」の取得、である。セミナーから研究所レベルを経て、学部レベルを経て、大学理事会にまでに至る、学生の参加チャンスの拡大が追及されている、また独裁的な運営と定款を乗り越える目的および「すべての不適切な支配的地位や依存的関係の止揚」が追及されている。

少なくとも大学で社会的民主主義の憲法規定の中に定められた原則を果たすよう試みるべきである。大学の民主化への参加と平行してSDSは学生の境遇でありながらキャンパス内外で 1959 年から政府が用意した非常事態発生法において国家の承認をもたらすために野党を取りまとめるように尽力した。まずは他の学生連帯である社会主義的大学同盟（SHB）、ドイツリベラル学生同盟（LSD）、ドイツ - イスラエル学生同盟（BDIS）との連携を通して尽力した。その上に法律専門家、インテリ、そして労働組合のある一部と続く60年代当初から非常事態発生法に反対するグループのネット化を通して尽力した。アメリカの SDS と同様にドイツの SDS も、この運動は社会の中に存在しいている他の抵抗運動を統合しようとする院外反体制派運動の種として、自分を定義し始める。

ストラスブール 1966 年秋：大学では10月にシチュアシオニスト・インターナショナルに関係あるグループよって「学生生活における困難」というパンフレットが配られた。その中で「学生生活は経済的、政治的、心理学的、性的そして特に知的局面によって観察されている」と学生を猛烈に非難する。またパンフレットは「批判的前衛（アバンギャルド）であることから遠く離れていようとしている学生達は『財閥の軍団』にまで降格した」と非難し、「日常生活で社会のすべてのセクターを『植民地化』する近代資本主義の機能メカニズムに順応した学生達は」、「彼らは自分の個人生活においても、性的関係の中にまで階級社会の一般的組織を再生している」と非難する。また「彼らは自分の状態を、見せかけた貧困の生活様式で貧困を洗練して補償したけれども、彼らの放浪者（ボヘミアン）的生活は見せかけである」と批判し、「様々な学生サークルを特徴付けているのはコミュニケーションの喪失である。並びに日

常生活から脱却するためのアヘンになりうる文化的商品の消費である」と批判する。「文化的生活の『アイドル』に対する無批判には、大学の日常生活にも影響を与えている一般的な批判不足が反映している」また「強烈な疎外が—パンフレットの結論曰く—大学生の生活を際立たせた。それと同時に間違った意識の表現として比類なき自己過信で自分を評価し過ぎながら強烈な疎外が大学生の生活を際立たせた」とも批判する。

この困難からの逃げ道として、パンフレットは次の様なテーゼを提供している。つまり「強烈な疎外が、全社会に対する批判によってのみ、批判されうる」ということである（註7)。学生達は現代社会の生産物であるが、彼らの疎外の止揚は全社会の変遷過程の部分となるべきである。こうした変遷過程は「モダン世界のラディカルな批判」によって起動され得るであろう。その批判支持者としてパンフレットは若者を指し示している。

彼らは強制された生活様式に対して反乱している。そして反乱の過程で社会の「包括的転換」の様相をもたらしている。しかしそのパンフレットは次の様に結論している。「反乱している若者の部分はパースペクティブな意識の無いままで純粋な拒否を表現している。」

シチュアシオニスト・インターナショナルの目で見れば、若者の「ラディカルな批判」を方向付けられ得るのは現存の労働者運動を通してではなくて、工場の労働者ソヴィエトを通して及び「一般化された自治体」の構築によって新しく組織されたプロレタリアを通してのみ可能なことであった。このプロレタリアートは製品社会への批判と日常生活への批判を通して及び「あそび」と人生の自由な「新再構築」を通して、社会の変動を成し遂げることが出来たであろう。この「プロレタリア革命」の結論から言えば「このような革命はフェスタ祭りになるであろう。さもなければ全く実行されないことであろう。なぜなら彼らが宣言した生活様式自体は、祭りの旗の下で創造されるからである。こうした祭りの最後の論理的基礎にあるのは遊びである。無駄な時間の無い人生または恥の無い娯楽は、唯一認められたルールである。」このパンフレットの配布は1966年10月26日に次の様な行動で導入されている。つまりストラスブール大学の12人の学生はサイバネティックスの教授の就任演説を邪魔する。「若い幹部の計画的コントロール」という嫌疑をかけるために学生は先生にトマトを投げる。「こうした行動についてイタリアのトリノの日刊紙さえ報告した」とシチュアシオニスト・インターナショナルは誇りを持って言う。

60年代前半に旧左翼党の学生または若者組織との繋がりを解消した学生グループの多彩さには、ヨーロッパやアメリカでの多数の分裂または新党結成も属していた。それらはトロツキー派、マルクスレーニン主義派（毛沢東主義派）、オペラ派または状況主義派が方向付けた各々の新党である。アメリカのSDS（民主社会を目指す学生）や社会主義ドイツ学生連盟を特徴付けていたのは、イデオロギーの短片化や組織的な隔絶および「グループ思索」やセクト作りを乗り越えようとしたことであった。そして彼らは自分達のことを、組織化ではなくてむしろ行動を通しての運動化や啓蒙に方向付けられていた社会運動の種（アバンギャルド）として理解した。その学生グループのメンバーは新左翼の知的前衛思想家とは違う世代に属していた。30年代の終わりまたは40年代の始まりに生まれたこうした学生達は、異なった社会化の経験と政治的経験をした。しかし冷戦の条件下および経済的隆盛になりつつある福祉国家の条件下で暮らす学生は、この社会の中にはステイタス・クオ（現在の状態）に関するオルタナティブをこの社会の中に考え出すことを凍結し

中断されているかに見える社会と対面していた。彼らは自分専用の解放要求を表現し、新しい運動化技術を持って自分の意志を通すために、新左翼サークルの中のインテリの考えと結びついた。

註１：‘68 年運動よりも各国新左翼党の方が早かった。
註２：作家グループ。
註３：社会主義か野蛮主義か。
註４：労働者階層。
註５：このテーマについては H.J.Pepping の論文が発表される予定である。
註６：この意味は「党内の学生派、労働派、などのグループの内面的コミュニケーションを重視することがＳＤＳの関心事である。」
註７：疎外を批判するためには、部分部分でなく全体社会を批判しなくてはいけない。